

広陵町埋蔵文化財調査概報 7

黒石東2号墳・3号墳
発掘調査概要報告書

広陵町教育委員会

序

広陵町は大和三大古墳群のひとつである馬見古墳群を推しており、数多くの古墳が築かれています。馬見古墳群という呼称は大和古墳群、佐記古墳群に対比するもので群と形成に有機的つながりをもつものではありません。

黒石東古墳は、古墳の分布密度から「馬見古墳群のうち南群に包摂される黒石・新山古墳群の南端に位置し、従来円墳と認識されていましたが、調査の結果、前方後円墳であることがわかりました。しかも6世紀には円墳に改築されている注目すべき古墳であることが判明しました。」

本書は、この古墳の発掘調査の一部をまとめたものです。幾分なりとも御活用いただければ幸いです。

最後に本調査の実施にあたり、御指導、御協力をいただいた関係者に厚くお礼申し上げます。

広陵町教育委員会

教育長 上 村 恭 三

例　　言

1. 本書は奈良県北葛城郡広陵町大字大塚字黒石に所在する黒石東2号・3号墳の発掘調査の概要報告書である。

2. 調査は幼香伸殖産の依頼を受け、広陵町教育委員会が実施した。

3. 調査は2次に及び、調査期間は下記のとおりである。

第1次調査 平成2年10月25日～平成3年2月4日

第2次調査 平成3年7月1日～平成3年9月3日

4. 調査面積と事業面積は下記のとおりである。

第1次調査面積 211m² 事業面積 689.46m²

第2次調査面積 354m² 事業面積 1,317.70m²

5. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 広陵町教育委員会 教育長 上村恭三

調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課 奈良県立橿原考古学研究所

調査事務局 広陵町教育委員会 社会教育課 課長 森川勇 主事 吉川勝規、主事 山下善敏

調査担当者 広陵町教育委員会 社会教育課 技師 井上義光

第1次調査補助員 前嶋祥江、前田玲子、高井美智子、蒲生玲子、多田慶子

第1次調査作助員 松井正一、藤井清治、北橋昇、青木勝義、藤井朝芳、平井藤太郎、佐谷耕治郎
藤山茂一郎、井岡武、植村光夫、米田秀吉

第2次調査補助員 浅尾和宏、前嶋祥江、高井美智子、蒲生玲子、多田慶子、藤村孝子

第2次調査作業員 松井正一、藤井清治、北橋昇、青木勝義、藤井朝芳

6. 本書をまとめるにあたり、下記の機関並びに諸氏に種々の御協力を得た。ここに記して謝意を表する。

泉森皎、川西宏幸、吉村公男、山下隆次、坂野平一郎、広陵古文化会

7. 図2に使用した新山、黒石古墳群の分布図は、「泉森皎『新山古墳群—広陵南部特定土地区画整理事業地内の発掘調査概報』広陵町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所1981年」掲載図をもとに作成した。

8. 本書の報筆、編集は井上が行った。

目 次

I	契機と経過	3
II	位置と環境	3
III	調査の概報	7
1.	黒石東2号墳	7
2.	黒石東3号墳	10
3.	出土遺物	16
IV	結語	20

挿 図 目 次

図1	黒石東2号・3号墳周辺遺跡	図9	黒石東3号墳第2主体実測図
図2	黒石東2号・3号墳周辺遺跡	図10	黒石東3号墳第3主体実測図
図3	黒石東2号・3号墳位置関係図	図11	黒石東2号墳出土家形埴輪実測図
図4	黒石東2号墳周濠土層断面図	図12	黒石東2号墳出土円筒埴輪実測図
図5	黒石東2号墳測量図	図13	黒石東2号墳出土土器実測図
図6	黒石東3号墳墳丘・周濠土層断面図	図14	黒石東2号墳出土壺実測図
図7	黒石東3号墳測量図	図15	黒石東3号墳出土土器実測図
図8	黒石東3号墳第1主体実測図		

図 版 目 次

図版1	黒石東2号墳 上 調査区全景（航空写真）下 調査区全景（航空写真）
図版2	黒石東2号墳 上 調査区全景（西から）下 周濠内遺物出土状況（東から）
図版3	黒石東2号墳 上 後円部周濠遺物出土状況（北東から）下 家形埴輪出土状況（東から）
図版4	黒石東3号墳 上 調査区全景（航空写真）下 調査区全景（航空写真）
図版5	黒石東3号墳 上 調査区全景（北東から）下 調査区全景（北西から）
図版6	黒石東3号墳 上 第1主体・天井石検出状況（南から）下 第1主体天井石検出状況（南から）
図版7	黒石東3号墳 上 第1主体（北から）下 第1主体（南から）
図版8	黒石東3号墳 上 第2主体（東から）下 第2主体（南から）
図版9	黒石東3号墳 上 第3主体（西から）下 第3主体（北から）
図版10	黒石東3号墳 上 墳丘盛堆積状況 下 墳丘盛堆積状況

I 契機と経過

広陵町は大都市大阪から直線距離で30km程の通勤圏内にあり、馬見丘陵南部一帯には日本住宅都市整備公団によって南北2.7km、東西1.8km、面積298haの範囲に真美ヶ丘ニュータウンが造成されている。これに先立ち昭和44年から3ヶ年にわたって72地点の確認調査がなされ、そのうち18基の古墳が発掘調査されている。昭和55年には、真美ヶ丘ニュータウンの南東部に土地区画整理事業が計画され、広陵町大字安部、大塚集落間の山林、南北600m、東西500mの範囲での宅地造成の事前調査によって13ヶ所で発掘調査がなされている。幸い、9基の古墳が3ヶ所綠地で保存されている。(図2-16~18、19~21、27~29)

既述してきたとおり、大阪市内への通勤圏であり、近鉄大阪線沿線という地理的条件によって広陵町大塚周辺では宅地開発により、現存する古墳は数基となっている。

第1次調査は、香伸殖産株式会社(代表取締役大津一)より広陵町大字大塚字黒石509-1地において貸店舗付共同住宅建設を目的とした埋蔵文化財発掘届出書を契機とする。申請地は「広陵町遺跡地図」の188黒石東古墳が記載されていたが、既に墳丘等は削平され平地となっていた。奈良県教育委員会文化財保存課、広陵町教育委員会が協議した結果、試掘調査を行うことになった。試掘調査は幅2mで都市計画道路築山・大塚線側から東西方向に長さ15mで設定した。当初は整地土下約60cmで地山に達し無遺物であったが、掘削を進めると落込部から倒立した状態ではほぼ完全な家形埴輪が出土した。地山の落込みは古墳周濠であることが判明したことにより、関係機関及び事業者と協議した結果、本調査を行うことになった。

現地調査は平成2年10月25日～平成3年2月4日、実働42日間を要した。

第2次調査は、第1次調査地の北側の地点で広陵町大字大塚字黒石508-1他3筆にあたる。ここで第1次調査と同じ香伸殖産株式会社より貸事務所建設を目的とした埋蔵文化財発掘届出書が提出され、関係機関による協議の結果、申請地が第1次調査で検出した前方後円墳の後円部に位置するため、本調査を実施することとなった。

現地調査は、平成3年7月1日～平成3年9月3日、実働48日間を要した。

II 位置と環境

黒石東古墳の築かれた馬見丘陵は、奈良盆地の西辺の一部を占める南北7km、東西3km、標高60～70mの低丘陵で、地質学上第三紀の終りの鮮新世から第四紀の更新世にわたる時期の堆積層で形成される。この丘陵は南から北へ傾斜しており、丘陵内部を北流する佐味田川と滝川の小河川によってさらに三支丘に分けられる。

奈良盆地の東部に築かれた柳本・大和古墳群に対して「馬見古墳群」と総称される古墳の多くは、三支丘のうち盆地に面した佐味田川と高田川に挟まれた支丘の東斜面に築かれている。そしてこれ

らは分布密度により3グループに大別して理解されている。すなわち、川合大塚山古墳（1）を中心とする北部の一群、巣山古墳（13）、新木山古墳（14）、乙女山古墳（6）を中心とする中央部の一群、新山古墳（22）、築山古墳（27）を中心とする南部の一群である。

詳細については他報告に譲り、ここでは黒石東古墳が包括される南群について概観する。南群には明治18年に後方部の竪穴式石室から直弧文鏡をふくむ30面以上の鏡、玉類、石製腕飾類、金銅製

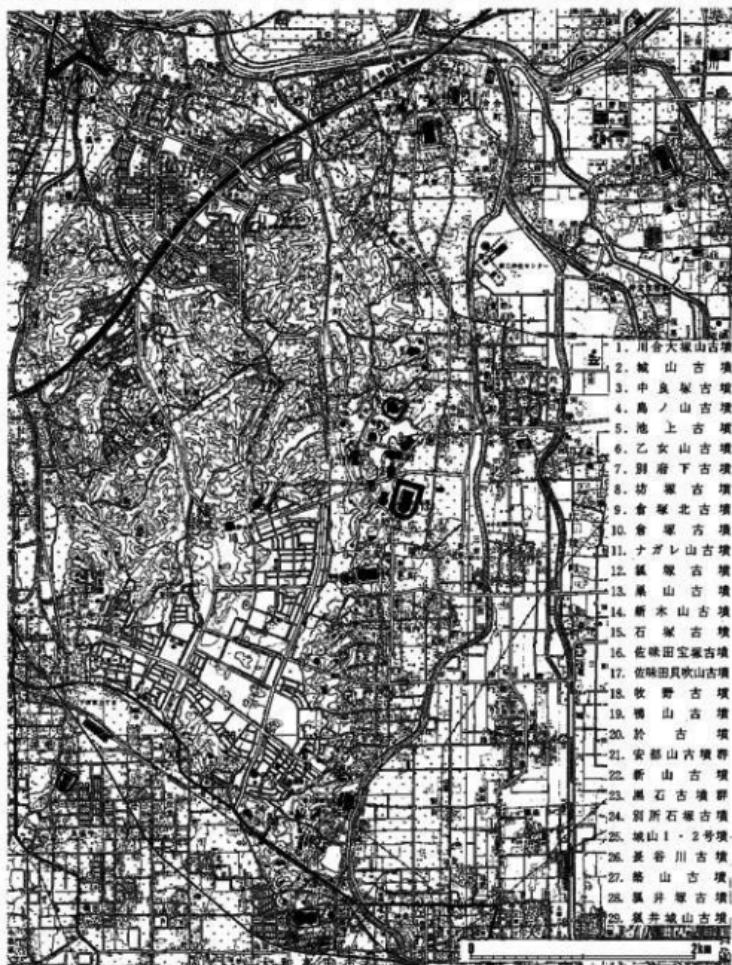


図1 黒石東2号・3号墳周辺遺跡

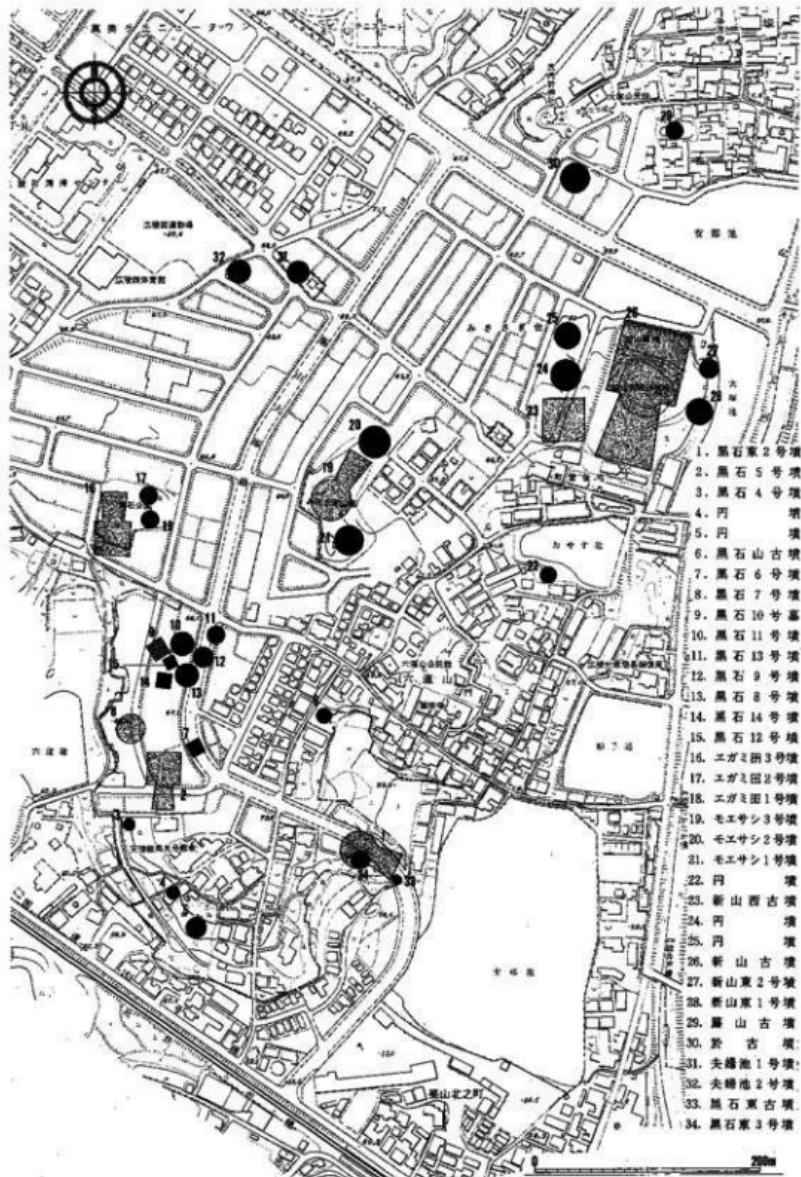


図2 黒石東2号・3号墳周辺遺跡

帶金具、刀劍等が出土した前方後方墳である前期の新山古墳（全長137m）と中期の前方後円墳で陵墓参考地に指定されている築山古墳（全長210m）がある。この他に別所石塚古墳⁽²⁴⁾、狐井塚古墳⁽²⁵⁾の100m未満の前方後円墳等で一群を形成しているとされている。しかしながら、新山古墳が前期の古墳であり、築山古墳⁽²⁶⁾が中期でも新相を示し、その範囲が漠然としている点から同一の古墳群としてとらえることに疑問が提出されている。そこで今一度、範囲を縮小し、黒石東古墳⁽²⁷⁾と新山古墳⁽²⁸⁾周辺について、詳細に観察する。（以下図2の対象番号）この地域は広陵南部特定土地区画整理事業により保存された9基の古墳以外は発掘調査が行なわれ、消滅している。その調査結果をもとに作成したのが図2である。この地域の古墳は立地条件等から、黒石支群の南群（2、7、8）、北群（10～15）、エガミ田支群（16～18）、モエサシ支群（19～21）、新山支群（23～28）に支群分けができる。このうち新山古墳（26）、エガミ田3号墳（16）、黒石5号墳（2）、は前方後方墳で前期の築造と考えられている。エモサシ3号墳（19）も柄鏡式の前方後円墳であり、有黒斑のある円筒埴輪を採集している。新山西2号墳（23）には、吉備地方に祖形が求められる器台形埴輪が伴っていたことから古墳時代前期と考えられる。⁽²⁹⁾ 黒石7号墳（8）も埋葬施設の内部構造と精円形埴輪から中期以降に下らないと考えられている。

また、黒石支群の北群では、弥生時代後期の方形台状墓である黒石10号墓（19）が調査されている。これら前期から中期にかけて築造された古墳の造墓経過については、エガミ田、モエサシ支群が未調査であるため明確にはできないが、新山古墳は小地域の首長墓とは考え難く別格として、この小地域の首長墓系列を考えれば、新山西2号墳→エガミ田3号墳・黒石5号墳→モエサシ3号墳・黒石7号墳→黒石東2号墳という造墓経過が推測される。

古墳時代後期になると各支群の前・中期古墳の周辺に小規模な円・方墳が築造される。既述の調査によれば、後期に黒石11号墳（10）が5世紀の後半に築かれ、黒石9号墳（12）、12号墳（15）等の木棺直葬あるいは竪穴式小石室を埋葬施設とするものが後続し、黒石8号墳（13）、13号墳（11）が横穴式石室を採用して6世紀末葉に築かれる。最後に、組合式石棺を古墳に直葬する14号墳が7世紀代に築かれている。この周辺の後期古墳のピークは6世紀代にあり、新山西2号墳の北側に築かれた円墳2基も該期の築造と報告されている。

また、広陵町から御所市までの葛城山系東麓に分布する後期古墳には、埋葬施設として竪穴式小石室の採用がみられ、当地域でも6世紀代を中心に黒石6号墳（7）、12号墳（15）、黒石山古墳⁽³⁰⁾、黒石東古墳⁽³¹⁾、円墳⁽³²⁾（5）がある。この他に、6世紀後半を中心に築造された安部山古墳群のうち3号墳においても採用されている。⁽³³⁾

註1 白石太一郎・前園実知雄「馬見丘陵における古墳の調査」奈良県史跡名勝天然記念物報告第29号 奈良県立橿原考古学研究所 1974年

註2 泉森校「新山古墳群—広陵南部特定土地区画整理事業地内の発掘調査概報—」広陵町教育委

員会 奈良県立橿原考古学研究所 1981年

- 註3 林部均「新山墳群新山西2号墳」「大和を握る」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1984年
註4 網干善教「北葛城郡広陵町大塚黒石山古墳群」奈良県文化財調査報告 第2集 奈良県教育委員会 1957年
註5 楠元哲夫「黒石東古墳」「奈良県古墳発掘調査集報I」奈良県文化財調査報告書 第28集 奈良県立橿原考古学研究所 1976年
註6 註1参照

III 調査の概要

1. 黒石東2号墳

(1) 位置と現状(図3)

黒石東古墳は、馬見丘陵の主幹尾根から東南東方向へ舌状に突出する小支丘に築造された古墳で、昭和49年に道路工事中に発見され、立会調査されて以降、昭和63年度の遺跡地図作成時には広陵町遺跡地図188、黒石東古墳(円墳)として認識されているだけで、墳丘の盛り上りもなく、整地された状況であった。

現状で周囲の谷が標高59.4~59.9mであり、墳頂部で64.0mであることから比高差は約5m程あることになる。尾根幅は上部で25m、基底部で約50m程ある。

(2) 墳丘と周濠

調査は工事と併行して行うため、敷地の東辺から幅4m、長さ20mのトレンチを設定し、試掘調査で検出した周濠を検出し、順次西へ拡張精

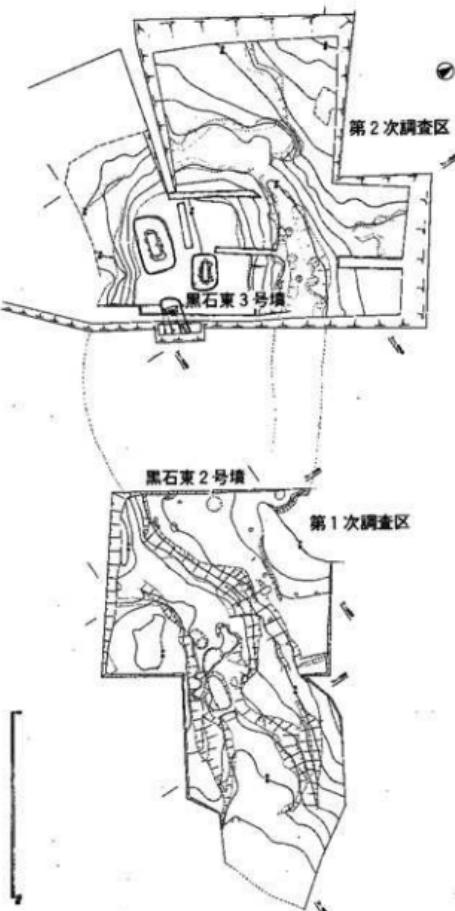


図3 黒石東2号・3号墳位置関係図

査するという方法で行った。

基本的層位(図4)

図4の土層図は調査区中央の堆積状況である。I-1~3層は整地土で北端で地山に達するまで整地がなされている。II層は淡灰色を呈する粘質土で最大80cmの層厚を計る。磁器等から江戸時代以降の土と考えている。このII層は調査区全面に認められ、新山古墳群の調査において検出されている池の浚渫土と同様のものと考えている。古墳築造後の周濠堆積土はIII層以下であるが、III層中からは平安時代の土器器片が出土する。該期においても壇丘部に手が加えられたと考えられる。IV層は各セクションで確認され、純粹な周濠埋土である。須恵器等の遺物はIV層-1の暗黃褐色土中から多くが出土する。V層は周濠最下層の埋土であるが須恵器片を包含しており、古墳築成直後の埋土とは考え難しい。

即ち、II層が近世の池の床土(恐らく南郷池の浚渫土) III層が後円部からくびれ部に見られる擾乱の時期、平安時代以降、VI層が5世紀末以降、V層がそれ以前となるが明確ではない。

墳丘(図5)

第1次調査で検出した各部は前方後円墳の後円部からくびれ部造出、前方部分である。墳丘盛土は既に削平され、古墳築成時の地山掘削部分である墳丘基底部及び周濠が残っている状態であった。

後円部の墳丘基底ラインは標高62.50mの等高線に求められ、基底部から墳丘側へ幅約1mの傾斜面があり、周濠掘削部と一致する。

くびれ部には造出と考えられる平坦部が認められ、3×2mの長方形を呈する台状部が残る。

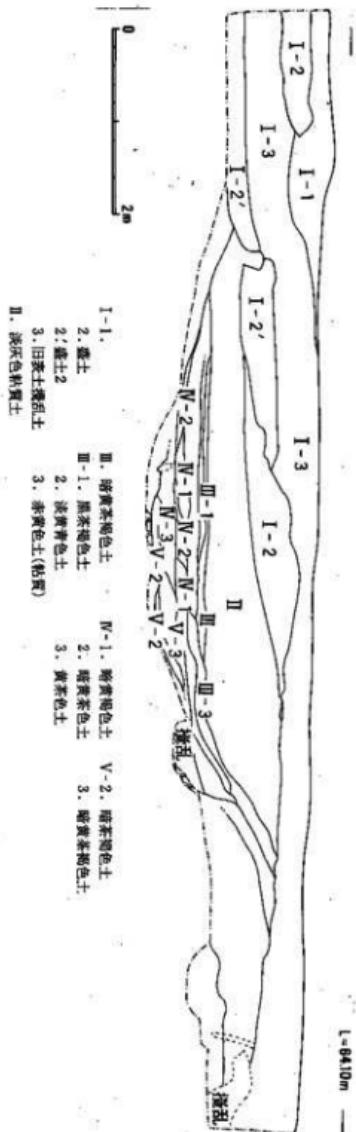


図4 黒石東2号墳周濠土層断面図

周濠が南に膨ることと、一部試掘調査の際に削平していることと、くびれ部に置かれたと考えられる家形埴輪の出土状況から、造出部分は $5\text{m} \times 2\text{m}$ 程の規模に復元可能である。造出部分は平坦で低いものであったと考えられる。

造出部から前方部にかけては標高 62.25m の等高線が基底線となる。前方部前端を示す造構は未検出であるが、周濠が開き気味に終息することと現状地形が尾根の先端であることから、前方部がさらに延びているとは考え難い。

後円部基底線
の弧から後円部
径は約 25m 、前
方部長は約 15m
(?)として
40m以上前方
後円墳であった
と考えられる。

周濠
地山を振り込
んで作られてお
り、周濠幅は後
円部で約 2.0m 、
くびれ部で約 1.2
~ 1.5m 、前方部
で約 2.0m を計測
する。

遺物は一部周
濠底に接するも
のを除けば、大
半が濠底から堆
積する層厚 $10\sim$
 20cm 程の流入土
であるIV-2層
(暗黄茶色土)、
IV-3層(黄茶
色土)、IV-4

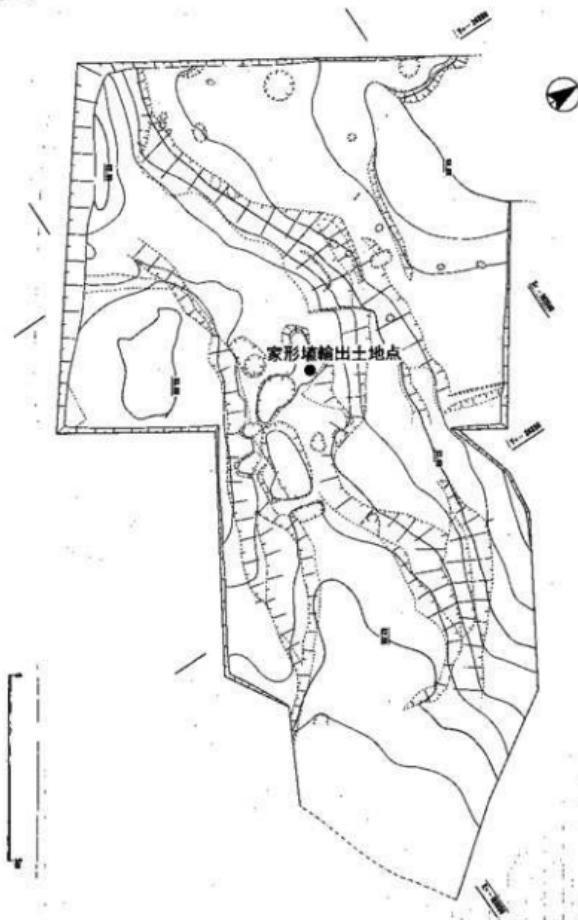


図5 黒石東2号墳測量図

層（黄茶褐色土）から破片となって出土する。遺物は5世紀末～6世紀代の須恵器が主体で、併に方形透し、有黒斑の円筒埴輪片が出土する。家形埴輪についても同様な層位から出土している。

2. 黒石東3号墳

（1）位置と状況（図3）

第2次調査地点は第1次調査の北西、幅約2.5mの南西から北東に延びる里道を界する位置にあたり、第1次調査で確認した前方後円墳の後円部にあたる。

第1次調査の現表面が標高64.0mに対し、第2次調査地点では標高66.0mと約2mの比高差があるため、遺構の保存状態は良好であるものと期待した。

調査は、敷地内部に工事残土が高く積み上げられていたため、里道に沿って設けられた擁壁と併行に幅4m、長さ21mのトレンチを設定し、順次西へ拡張する方法で行った。

（2）墳丘と周濠

墳丘は当初設定したトレンチで明確となっている。但し、不注意な断割で埋葬施設を削平してしまった。

基本的層位（図6）

図示した土層断面図は断割部の東壁で1層は表土層でゴセ土である。2・3・4・5・6・11・12・13・14層は古墳周濠に厚く堆積し、第1次調査のII層に対するもので南郷池の浚渫土と考えられる。層差が認められることから浚渫は數次にわたって行われたと判断している。黒色土層（7層）はこの浚渫以前の旧表土である。36～42層は周濠

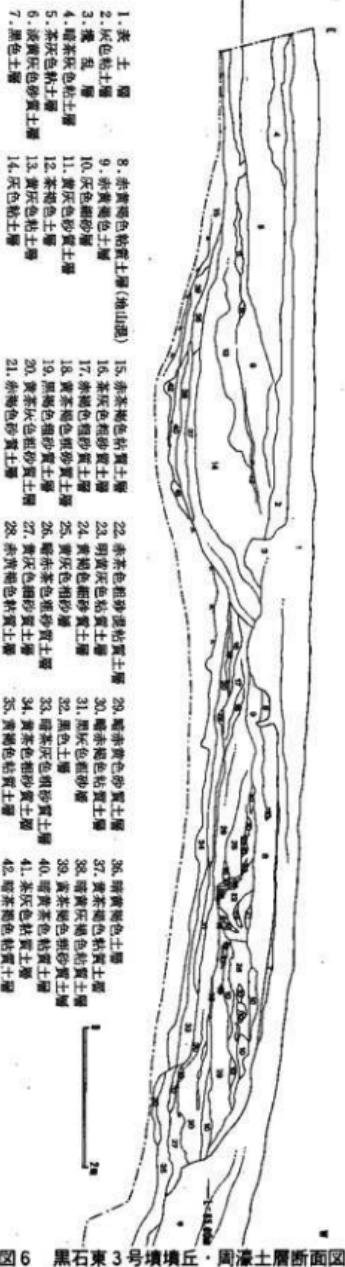


図6 黒石東3号墳丘・周濠土層断面図

埋土で第1次調査のⅢ・Ⅳ層に相当する。墳丘盛土は8~10層、16層~34層で築かれていた。

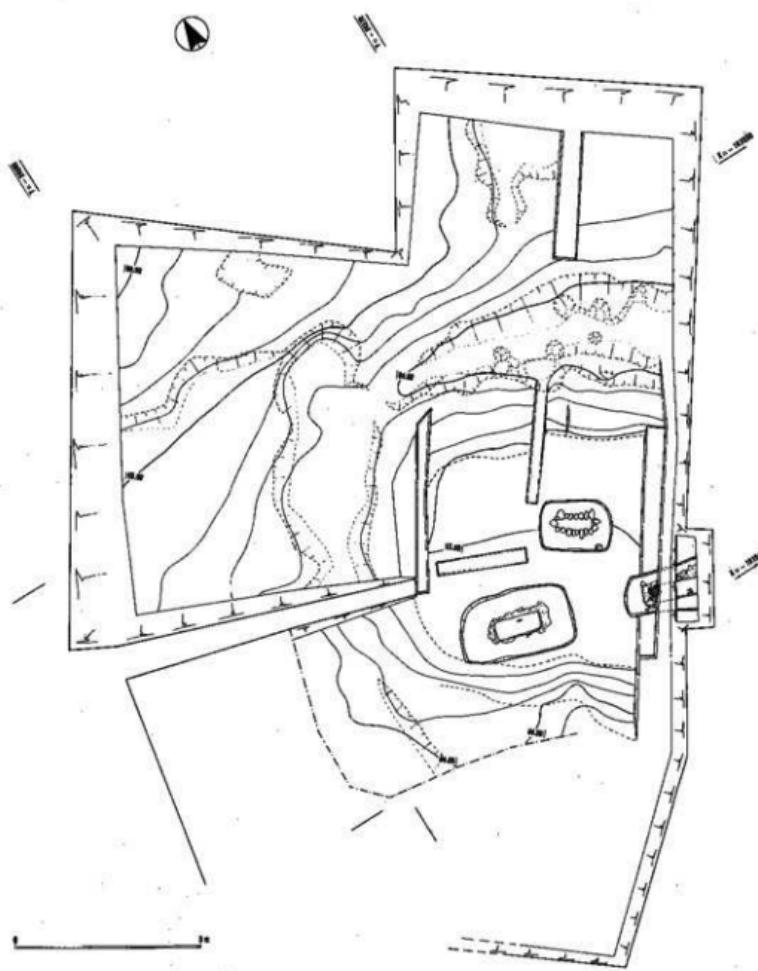


図7 黒石東3号墳測量図

墳丘（図7）

第1次調査の結果から、第2次調査では、前方後円墳の後円部が検出できると予想していたが、前方後円墳（黒石東2号墳）を主軸上で後円部を断割り、円墳を築いていた。

墳丘は短径約10m、直径は現状で約9m遺存しているが、弧状を呈する掘割を追うと第1次調査区東端に達することから、17m程に復元され、長椭円形となる。後世の擾乱が墳丘・周濠の各部にあり、墳丘基底となる等高線は明瞭な円を描かない。墳丘の北東側の周濠が弧状を呈することから円墳と判断している。

墳丘盛土は、地山直上に茶褐色系の粗砂質土層（33・34層）が確認され、その上に旧表土面（31層）が検出される。旧表土面から周濠にかけて16~20層まで砂質系の盛土が続く。この面が東方から続く前方後円墳の後円部の盛土とは断言できないが、それ以上の盛土とは構成が明らかに異なる。つまり、赤黄色系の粘質土（28・29層）と灰色細砂層（10層）を互層に積み墳丘を作りあげており、赤黄色系の粘質土層から埴輪片が出土した。14、17、21、22、24、26、27層は第3主体の墓壙及び棺の埋土であり、その上の赤黄褐色土（8・9層）は埋葬施設埋設後の盛土である。

周濠

周濠は墳丘の北と西で確認している。北側周濠は東端で幅約2.8m、深さ約25cm前後、北へ弧状となるが規模は縮小し、幅約1.2m程となる。この周濠の南端が恐らく第1次調査区北西隅の落込みに続くと考えられている。

東壁の土層図6の36層が第1次調査のⅢ—1層、37層がⅢ—2層、38層がⅢ—3層、40層がⅢ—5層に、41層がⅣ—3層、42層がⅣ—1層に対応すると考えられている。遺物は38・40層から多くが出土する。出土状態は、須恵器片が有黒斑、鱗付、朝顔形埴輪片と同一層位にあり、円墳築造時に前方後円墳を大胆に破壊していることが判る。墳丘西側周濠は既述した擾乱坑に削平され、北側周濠へのとり付き部は不明である。現状で幅約2.0~3.0mで、深さは約25cm前後である。

（3）埋葬施設

墳丘内から3基の埋葬施設を検出した。調査順に第1・2・3主体とした。

第1主体（図8）

墳丘のほぼ中央で検出した竪穴式小石室を第1主体とした。長さ194cm、幅134cm、深さ65cmの隅丸長方形墓壙に小石室を築く。内法は長さ100cm、幅27~40cm、高さ30cmを計る。主軸はN-54°—Wにある。床面は平坦で、石室側壁のうち基底部は長さ30cm程の川原石を3石配し、2段目はやや小型の石を使用する。天井部の取り付けの関係から一部補填的な石積が行われ、三段に積む箇所もある。両木口には平板な川原石1石を立てて使用している。天井石は長さ40cm以上の細長い石材を6石木口積みし、隙間を15cm以下の川原石で埋める。この上に灰色粘土を被覆させていた。石室内

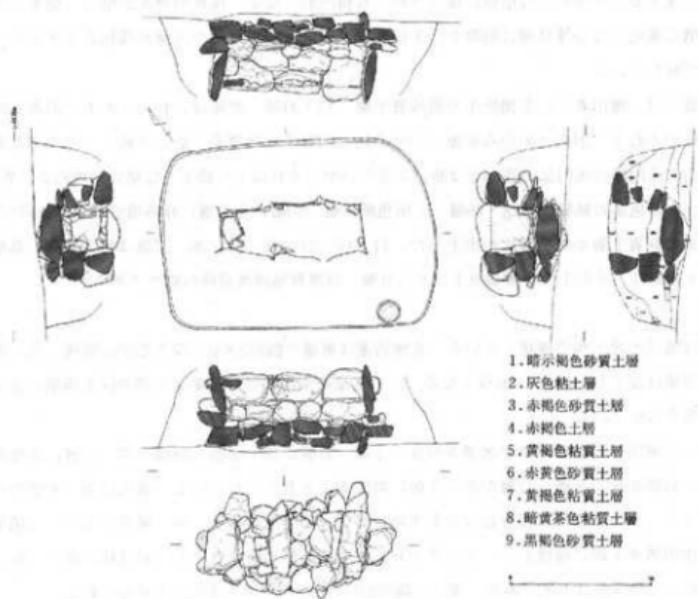


図8 黒石東3号墳第1主体実測図

部には石室構築材の剥落の際の石と木棺の安定を図っていたものか赤色顔料が付着した板石が置かれていた。これ以外、副葬品は無い。墓壙の南隅に須恵器杯蓋が置かれていた。

第2主体(図9)

墳丘の南西隅につくられた木棺直葬を第2主体とした。長さ316cm、幅185cm、深さ45cmの墓壙中央に箱形木棺を置く。箱形木棺は長さ125cm、幅50cm、高さ30cmを計る。主軸はN-68°30'Eにある。木棺は墓壙に据置いた後に、淡黄灰色粘土(7層)を木棺の側板と木口に当て数回に分けて埋め戻しを行っている。棺蓋上にも黄褐色粘土(5層)を盛っており、棺倒壊時に棺内に落込んでいた。副葬品は棺中央北寄りに鋒を東に向けた刀子が置かれていた。棺の東木口付近には炭化物も認められたが木棺材とは考え難い。

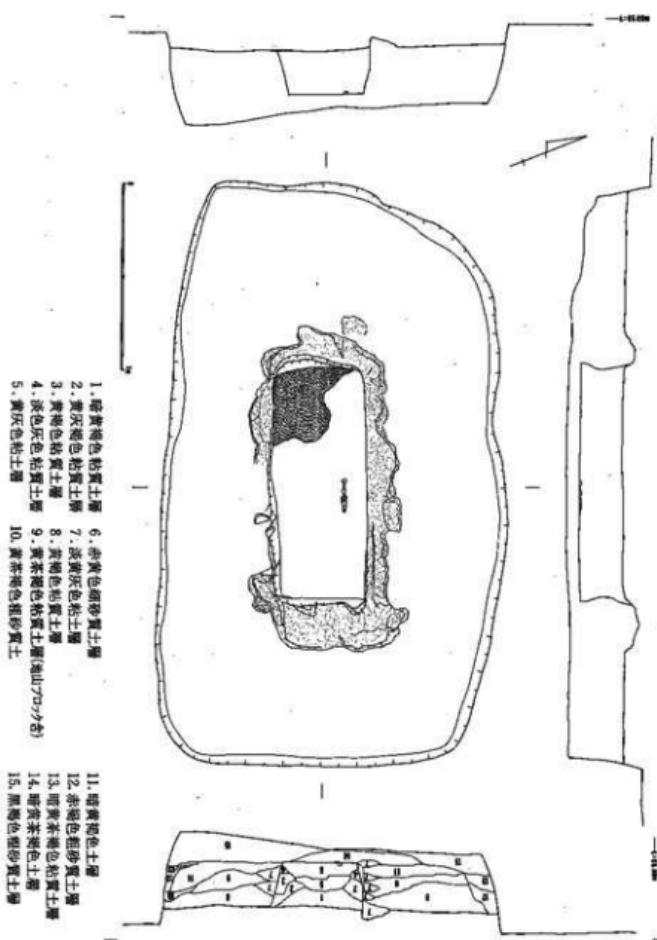


図9 黒石東3号墳第2主体実測図

第3主体(図10)

墳丘の南で検出した木棺直葬で、墳丘断面で一部削り取ってしまった。墓横は幅120cm、深さ40cm、長さ200cm以上を計り、平面プランは長方形を呈する。墓横の中央には幅40cm、高さ35cm、長さ120cm以上の箱形木棺を置く。主軸はN-58°-Wにある。木棺の木口には粘土塊と長さ15cm前後の山石を置き木口板をおさえる。側板も第2主体で観察されていた粘土を当て付けている。

副葬品は木口棺内に須恵器杯蓋、身を伏せた状態のものと、棺の中央南寄りに鉢をそれぞれ西と東に向かた鹿角装刀子がある。

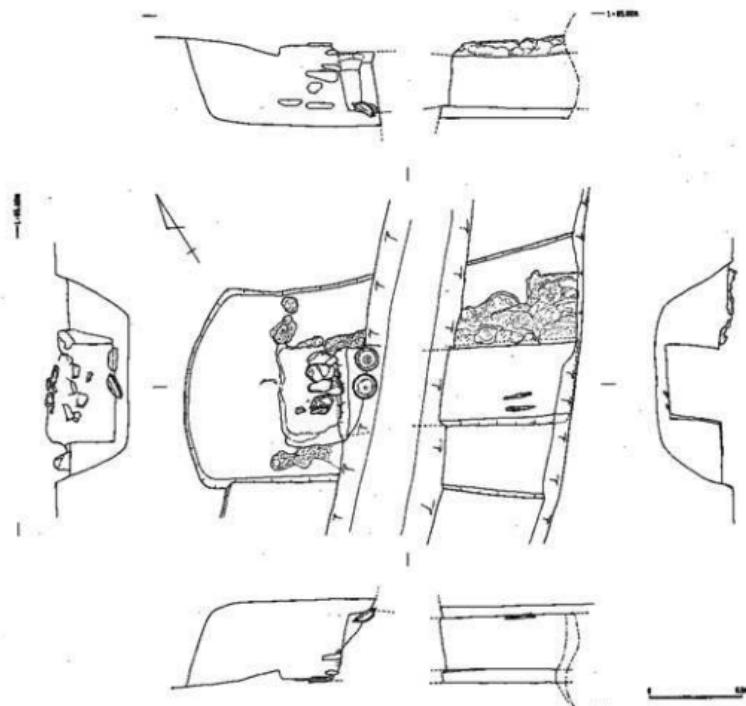


図10 黒石東3号墳第3主体実測図

3. 出土遺物

出土遺物は第1次調査と第2次調査に分かれるが、恣意的に2号・3号墳各に分けて報告する。

(1) 黒石東2号墳出土遺物

家形埴輪(図11)

発掘調査の契機となった家形埴輪で、立会時に重機で破碎しなければほぼ完全な状態であった。切妻造の家で、平入形成。基台部は平で39.5cm、妻で29cmの長方形を呈し、下端より約6.5cmの所に、高さ3.5cm、厚さ3cmの裾回板を巡らせる。平は柱を削出し、妻では簾描きで柱3本を表現する。2間3面の家となっている。入口は、平の1面右側に設けられ、 11.5×5 cmの大きさで裾回板より2.5cm上部の所より切り込まれている。屋根には網代で葺いた表現が簾描きされ、化粧棟木の出もある。棟には横位に貫を線刻によって表現している。破風板間は69cmを計る。成形は粘土紐を積み上げたもので、内面には指ナデの痕跡が残る。内外面をもとに淡褐色を呈し、焼成は良好である。

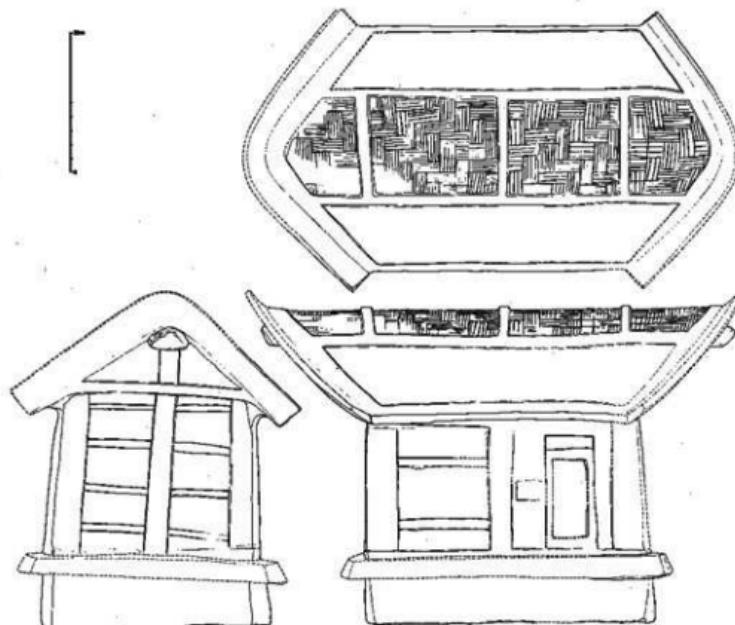


図11 黒石東2号墳出土家形埴輪実測図

円筒埴輪（図12）

1・2は黒石東2号の周濠埋土中より出土した円筒埴輪である。1は大型円筒埴輪の破片で突帯は断面台形を呈し、右側に方形透しが観察できる。有黒斑を有し、外面2次調整はA種ヨコハケである。2は縁付円筒埴輪の破片で突帯は断面台形を呈し、縁が付く。図示していないが他の個体には突帯付加にあたって施される方形刺突が加えられるものがある。内面調整は磨耗がひどく不明である。破片の口径から中型品も存在する。II期の埴輪の特徴を色濃く残すが中型品も存在することから、5世紀初頭から前半という幅を考えておきたい。

須恵器（図13、14）

2号墳周濠内から出土した土器で図13のうち1～4は蓋杯の杯で1は口径15.6cm、器高4.6cm。稜は短く、鋭さを欠く。2は口径18.4cm、器高4.8cmで稜は沈線を天井端部に巡らす。焼成は良好。3は口径13.3cm、器高3.8cm、稜の痕跡はなく、丸味を帯びている。口縁端部は丸く仕上げ、回転ヘラ削りは天井部に一部残る。4は口径16.6cm、残存高2.5cm、稜を沈線で表わす。5・6は杯身で5は口径13.6cm、器高4.5cm口縁端部は丸く仕上げ、回転ヘラ削りは全体の1/2前後である。6は口径12.2cm、器高4.25cmでたちあがりは短く内傾する。7・8は所謂、長脚二段無蓋高杯で7は口径10.6cm、8は11.6cm程である。両者共に体部外面に刺突を持つ。脚は細い基部から直下に下り、二段にわたり三方向に長方形のスカシを刻む。9・10は甕で9の体部は球体をなし、その最大径は体部の1/2であり、10cmを計る。口頭基部は太く、頸部に粗雑な波条文を巡らせる。10は体部最大径が体部中央にあり、10cmを計る。体部中位に比較的大きな円孔が穿孔される。円孔周囲には2条の沈線が巡り、頸部外面にも見られる。11は鉢で口径13cm、器高13.2cmを計る。体部はナデで仕上げる。12～14・16は壺で、12は台付長頸壺、13は短頸壺、14は長頸壺と考えられる。15・17には体部内面に同心円印がみられる壺である。図14の壺は口径38cm・器高87cmを計る。体部最大径は肩にある。口縁端部は丸く肥厚し、頸部には2条の波条文が巡る。体部外面は平行印き、内面には同心円印きが残る。

1の杯蓋、5の杯身、9の甕は陶邑のMT-15に対応し、2の杯蓋がTK-10、3の杯蓋、4、6の杯身、7、8の高杯、10の甕がTK-43と考えられ、6世紀の初頭から後半の時期を与える。

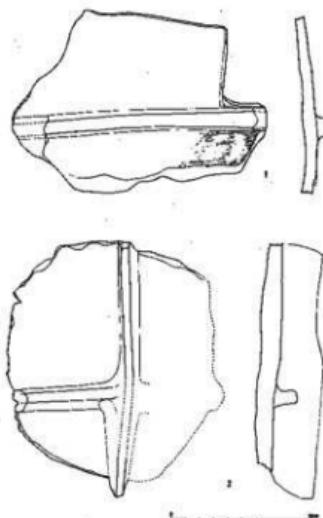


図12 黒石東2号墳出土円筒埴輪実測図

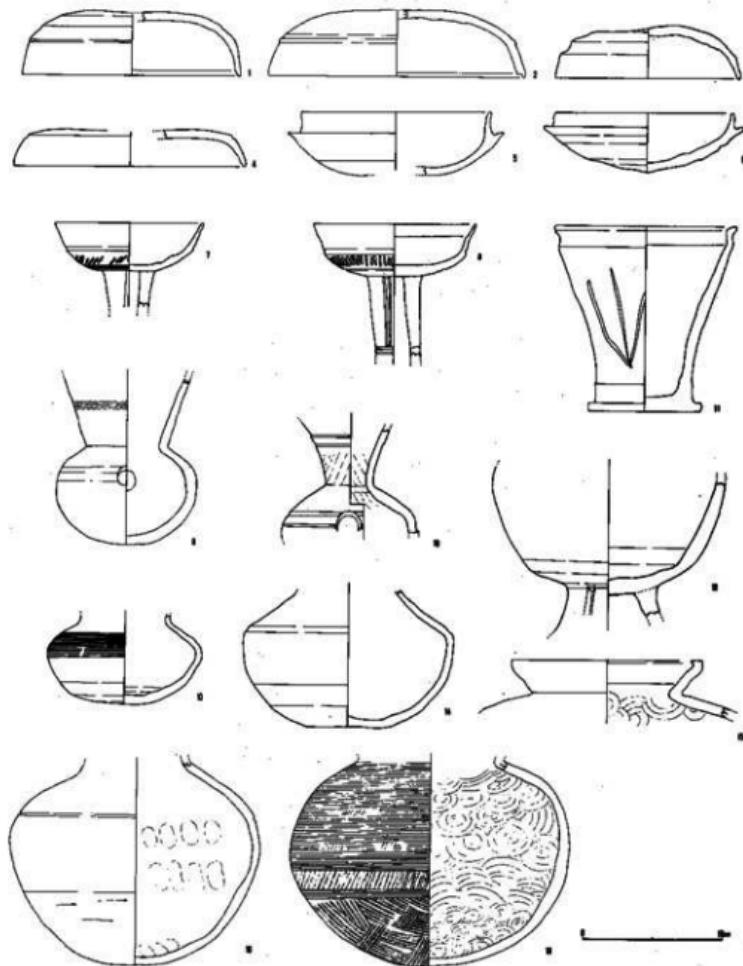


図13 黒石東2号墳出土土器実測図



図14 黒石東2号墳出土甕実測図

(2) 黒石東3号墳出土遺物

須恵器 (図15)

図15の蓋杯1、2は第1主体墓壙南隅から出土したものである。1の蓋は口径16.2cm、器高5.0cmを計る。縁は沈線を天井端部に巡らすことによって相対的に浮かび上がらせる。2の杯身は口径13.6cm、器高4.9cmを計る。たちあがりは短く内傾きし、縁部は丸く仕上げる。3、4は第3主体の木口から出土した。3は杯蓋で口径13.6cm、器高4cmを計る。縁はなく、口縁端部は丸く仕上げる。4は口径11.6cm、器高4.2cmを計る。たちあがりは短く内傾し、底部外面1/2前後に回転ヘラ削りがみられる。5は墳丘盛土内から出土した杯身で口径9.8cm、器高5.0cmを計る。たちあがりはわずかに内傾し、縁部に段を有する。受部は短い。6は東側周濠埋土から出土した杯身で口径9.6cm、器高3.2cmを計る。たちあがりは短く内傾して縁部は丸い。底部はヘラ切未調整となっている。

時期は第1主体出土の基杯がTK-10、第3主体出土の基杯はTK-43に対し、墳丘盛土内部出土の杯身はTK-47、周濠埋土の杯身はTK-209と考えられる。

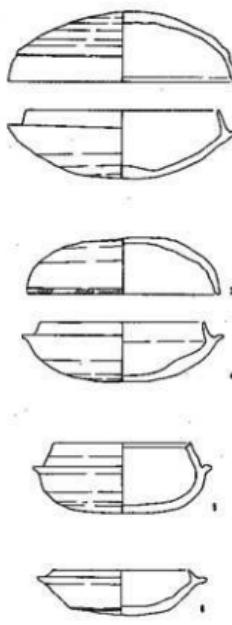


図15 黒石東3号墳出土土器実測図

IV 結語

黒石東2号墳・3号墳の2次にわたる発掘調査の成果をまとめ、問題を提起しておきたい。

黒石東2号墳

墳丘は馬見丘陵の主幹尾根から南東方向に舌状に延びる支丘の先端に営まれた前方後円墳で、復元した規模は後円部径約25m、前方部長15mで全長40m以上となる。主軸はN-65°-Eにあり、くびれ部に5m×2m程の造出が存在したと考えられる。周濠は地山を掘り込んで作られ、幅は約2m程あったと考えられる。墳丘は3号墳築成とそれ以降に大半を削平され、遺物は周濠からのみ出土した。遺物は家形埴輪、円筒、朝顔形埴輪が主である。築造時期は5世紀初頭から前半と推定されている。周辺に分布する前方後方墳、前方後円墳から続く小地域での主長墓系列上にある古墳

と考えられる。

首長墓の系列は馬見丘陵で最初に築造される新山古墳が端緒となり、新山西2号墳が4世紀後半に築かれ、続いて前方後円墳であるエガミ田3号墳、黒石5号墳が4世紀末葉、モエサシ3号墳、黒石7号墳が4世紀末～5世紀初頭と考えられ、最後に黒石東2号墳が5世紀初頭～前半の時期に築造されたと考えられる。⁽¹⁾その後の首長墓系列にあると考えられる前方後円墳は認められず、南部の柴山古墳周辺へ移るのかもしれない。

黒石3号墳

黒石東2号墳の後円部を利用して築造された円墳で短径10m、長径17m、高さ約2m程と考えられる。黒石東2号墳後円部西側を利用し、弧状を呈する掘削で墳丘を形成する。盛土は下層に2号墳の盛土を残した上に、さらに3号墳の盛土を施す。埋葬施設3基のうち最も古いものは第1主体の堅穴式小石室で6世紀前半、第3主体は須恵器から6世紀後半、第2主体は墳丘の東端にあるため、それ以降の所産であろう。箱形木棺を粘土で密封する型で棺を納める類例として7世紀第に築かれたカタビ2号墳がある。⁽²⁾

3号墳墳丘周辺から出土する須恵器が5世紀末～6世紀末までとかなり幅があり、墳丘がさらに西へ延びることから、検出数以上の埋葬施設が存在した可能性がある。

堅穴式小石室は広陵町から御所市にかけて葛城山東麓で数多く調査されている。黒石東古墳の報告の中で楠元哲夫氏は小石室をA・B・Cの3型式に分け、Aは木棺が入る最小限の横穴式石室とし、堅穴式小石室Bを床面に対し高さのあるもの、Cをそうでないものと定義し、分布地域、築造年代の違いも指摘している。また、C型式の堅穴式小石室の被葬者像を「洗骨、乳幼児葬によるものではなく、社会的身分の差による成人の埋葬施設の反映」とされる。白石太一郎氏は石光山古墳群の報告書の中で「従属的な埋葬施設」である堅穴式小石室、箱式石棺、埴輪棺等をまとめて、⁽³⁾家長の世代に属する類縁者の再葬を含めた同時葬の存在を指摘されている。この同時性は寺口千塚古墳群の調査で説明されている。寺口千塚古墳群は、堅穴系横口式室を含む横穴式石室を内部主体とする古墳群で、10-11号墳では、1墳丘内に5基の小石室が主石室と一緒に築かれていたからである。

これらを前提に黒石東3号墳第1主体の堅穴式小石室を再検討すれば第2・3主体の木棺が6世紀後半以降と考えられるため、6世紀前半に築かれた堅穴式小石室が「従属的な埋葬施設」である場合、同一墳丘内に主となる埋葬施設が存在し、再葬墓である可能性をあげられる。

3号墳は既造の前方後円墳を削平している点で異例であり、5世紀末～6世紀末まで長期にわたる遺物の出土が認められる点でも特殊であると考えられる。

堅穴式小石室の埋葬施設としての採用は、木棺直葬に伴うもの、(火野谷山古墳群、石光山古墳群)⁽⁴⁾横穴式石室に伴うもの(寺口千塚古墳群、寺口忍海古墳群)⁽⁵⁾と単独で存在するもの(兵家4号墳、⁽⁶⁾的場池5号墳、⁽⁷⁾安部山3号墳)がある。単独で存在する小石室がある以上、全てを一括して従属の埋葬施設とはできない。

また、堅穴式小石室の存在は「葛城山東麓地域における從属階層の墳墓造営についての規制が弱
さ」^{註1}から派生するものなのか、「集団内部における社会的な地位の違いを反映」^{註2}したものなのか、い
ずれにしても地域集団の構成を分析する上で重要となるものであろう。

- 註1 関川尚功「大和における大型古墳の変遷」「考古学論叢」第11冊、奈良県立橿原考古学研究所
1985年
- 註2 東 満、坂 靖「佐味田・カタビ古墳群」奈良県遺跡調査概報 第1分冊 奈良県立橿原考
古学研究所 1990年
- 註3 橋元哲夫「石黒東古墳」「奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ」奈良県文化財調査報告書第28集 1976年
- 註4 白石太一郎ほか「葛城・石光山古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物報告 第37冊 1976年
- 註5 坂 靖「寺口千塚古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物報告 第26冊 1991年
- 註6 松田真一ほか「新庄火野谷山古墳群」奈良県文化財調査報告書第31集 1979年
- 註7 千賀久編「寺口忍海古墳群」新庄町文化財調査報告書第1冊 1988年
- 註8 伊藤勇輔「兵家古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物報告第37冊 1978年
- 註9 伊藤勇輔「的場池古墳群」当麻町文化財調査報告第1集 1982年
- 註10 白石太一郎、前園美知雄「馬見丘陵における古墳の調査」奈良県史跡名勝天然記念物報告第
29冊 1974年
- 註11 註5 参照
- 註12 註8 参照

図版



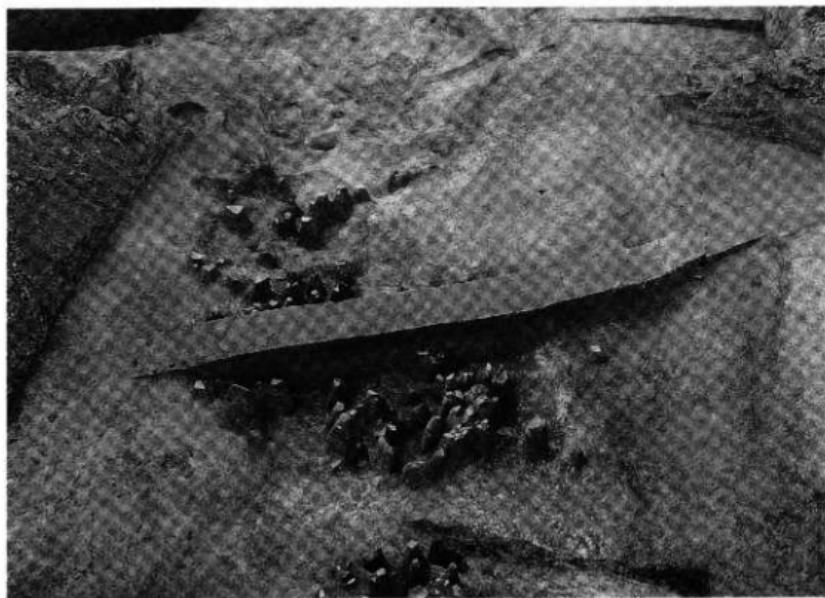
調査区全景（航空写真）



調査区全景（航空写真）



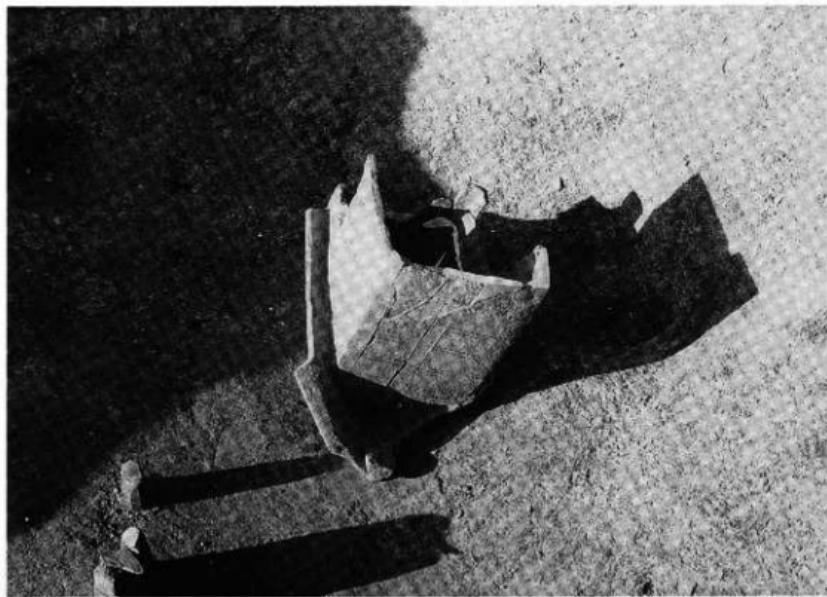
調査区全景（西から）



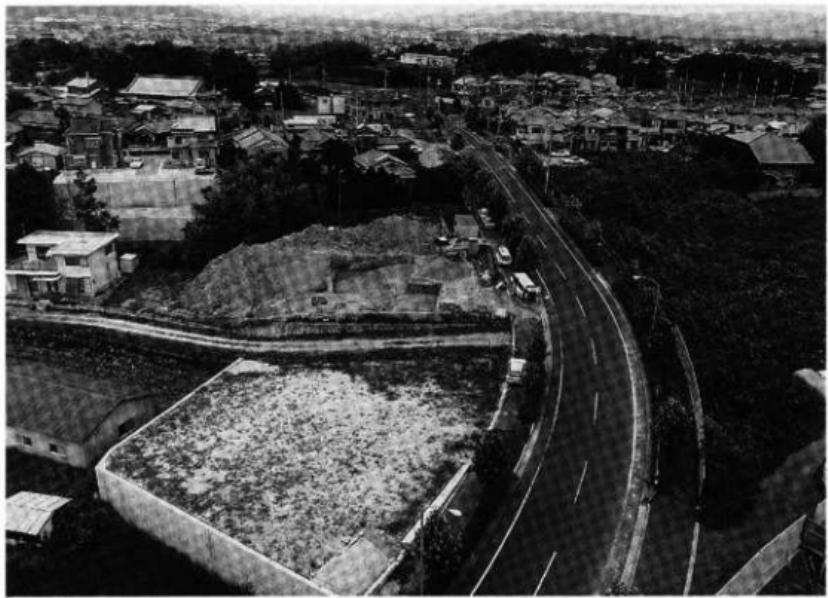
周濠内遺物出土状態（東から）



後円部周濠遺物出土状態（北東から）



家形埴輪出土状態（東から）



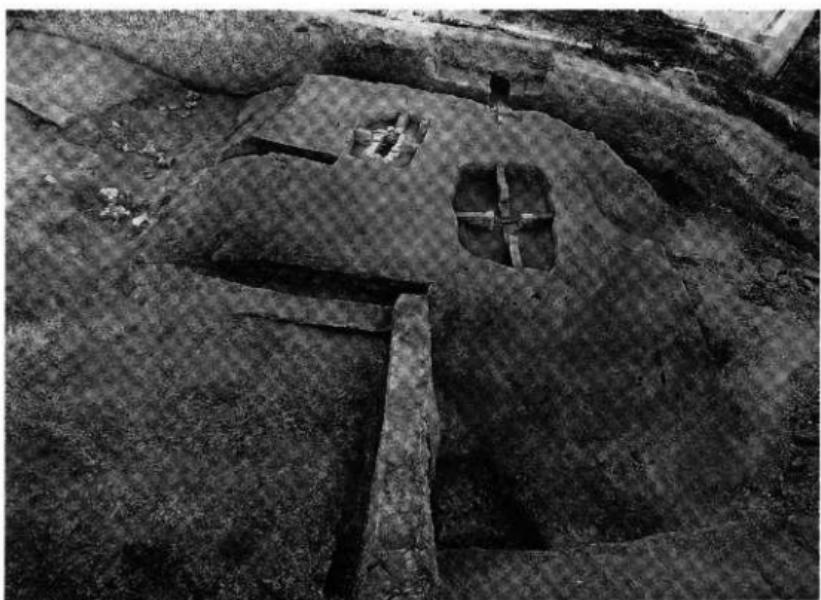
調査区全景（航空写真）



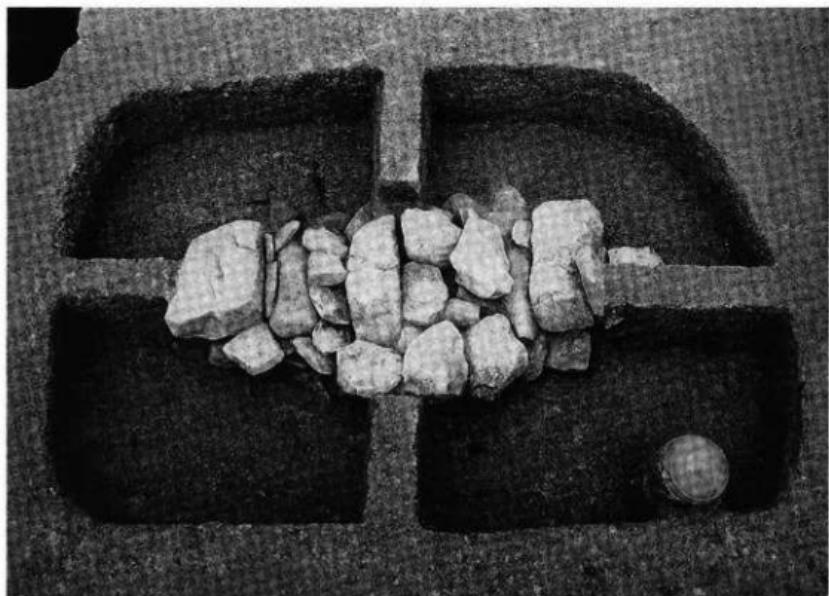
調査区全景（航空写真）



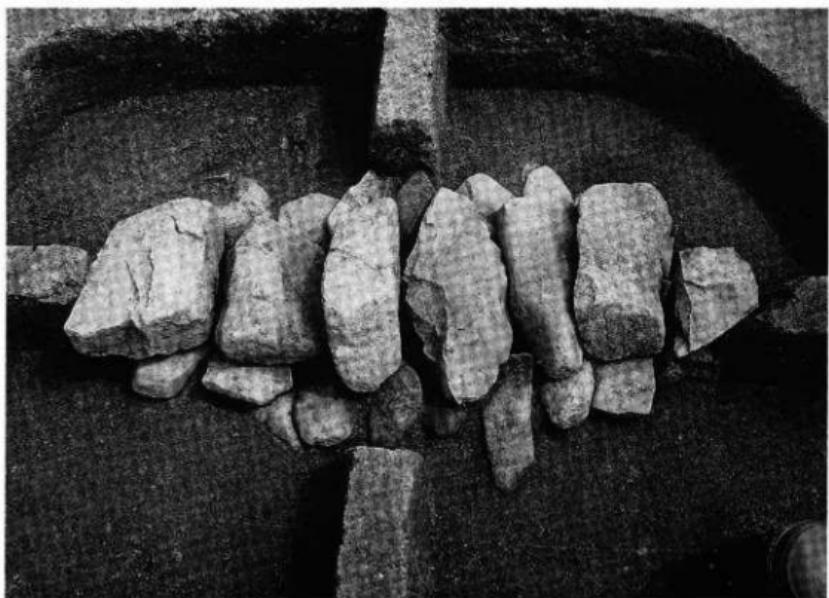
調査区全景（北東から）



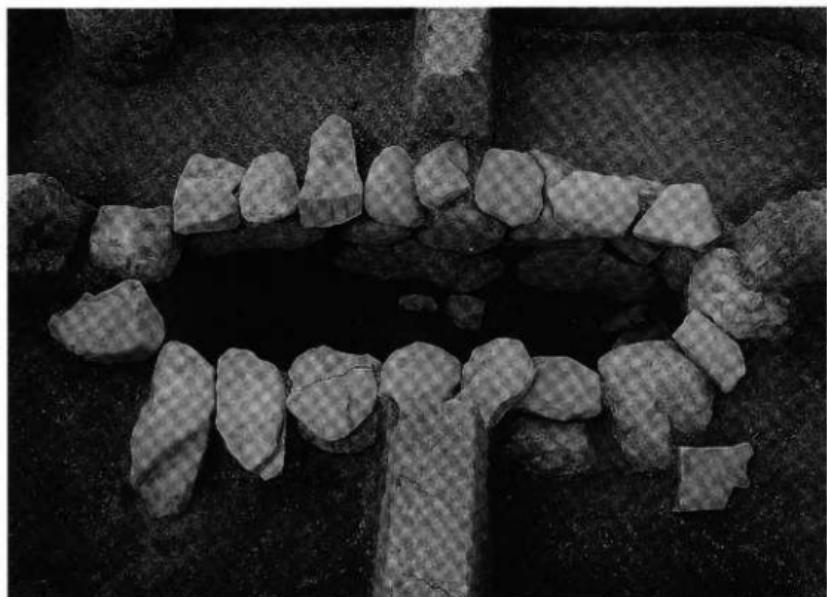
調査区全景（北西から）



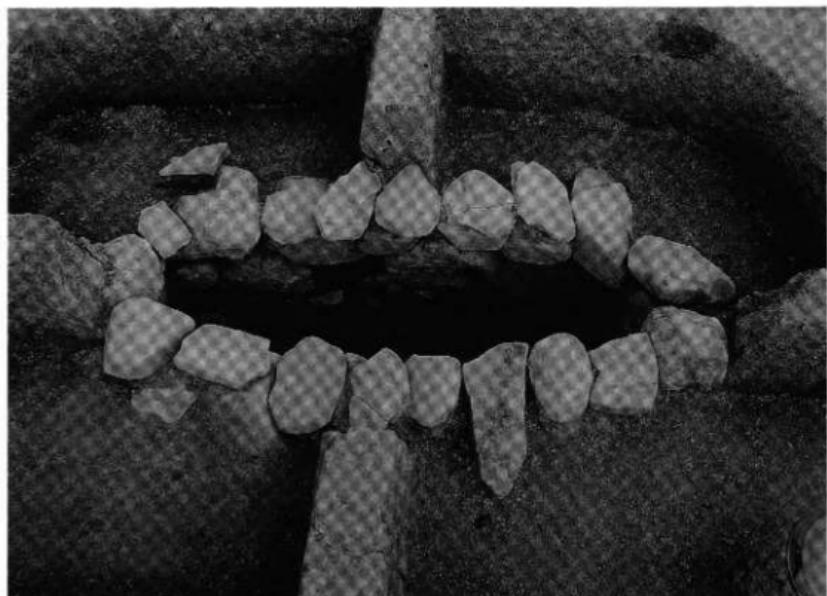
第1主体 天井石検出状況（南から）



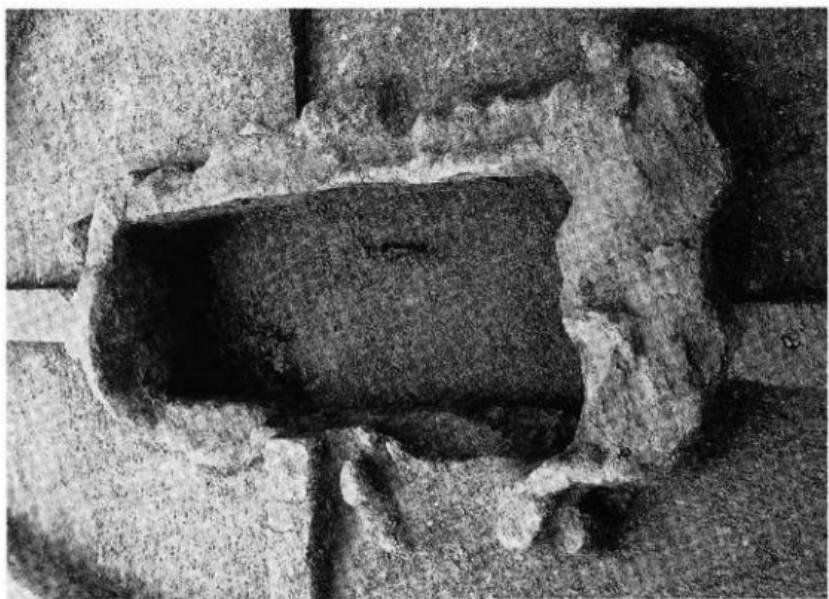
第1主体 天井石検出状況（南から）



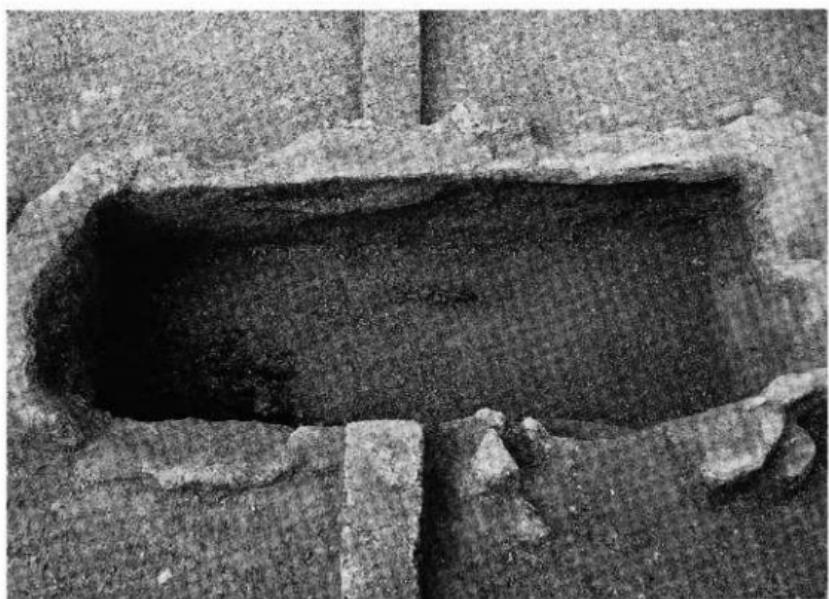
第1主体 (北から)



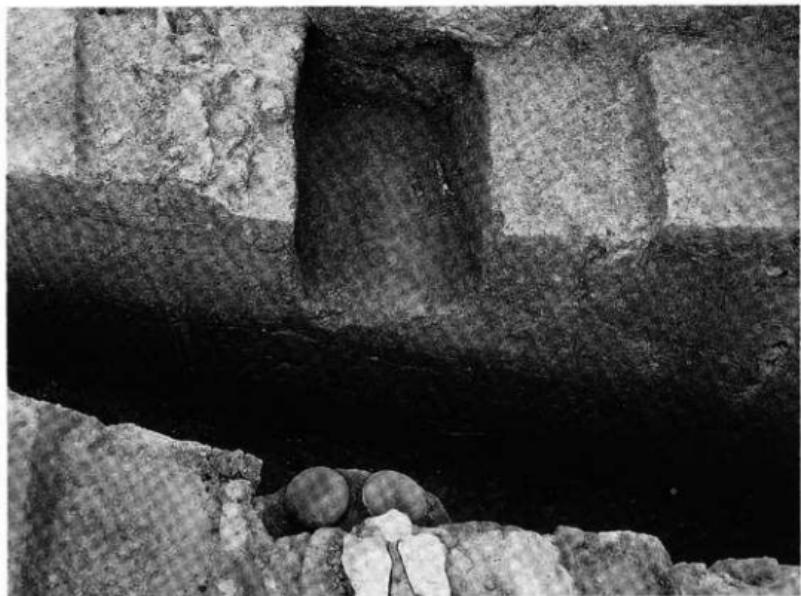
第1主体 (南から)



第2主体（東から）



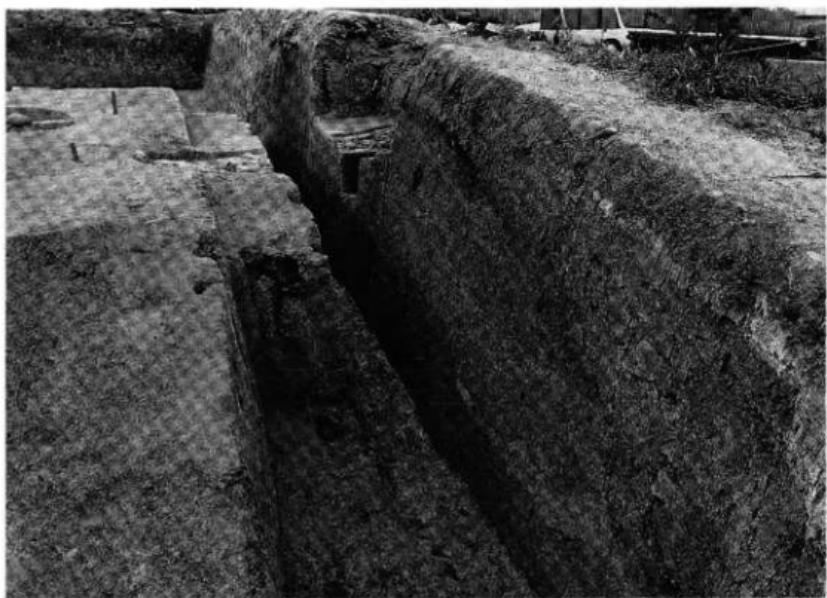
第2主体（南から）



第3主体（西から）



第3主体（北から）



墳丘盛上堆積狀況



墳丘盛上堆積狀況

広陵町埋蔵文化財調査概報 7

黒石東 2 号墳・3 号墳

発掘調査概要報告書

平成 5 年 3 月 31 日

発 行 広陵町教育委員会

印 刷 橋本印刷株式会社